

平成 28 年度 学校自己評価システムシート (県立川島ひばりが丘特別支援学校)

目指す学校像	・将来の自立や社会参加に向け、心豊かに、たくましく生きる力を身につけることのできる学校。 ・保護者や地域、関係諸機関から信頼され、誇れる学校。
--------	--

重点目標	1 児童生徒一人ひとりの可能性と力を最大限引き出す授業づくり。 2 センターの機能の更なる充実と、地域に開かれ地元の学校として親しまれる学校づくり。 3 年間を通して児童生徒が健康で安全に学習できる環境づくり。
------	---

※ 重点目標は3つ以上の設定も可。重点目標に対応した評価項目（年度達成目標を意味する。）は複数設定可。
※ 番号欄は重点目標の番号と対応させる。評価項目に対応した「具体的方策、方策の評価指標」を設定。

達成度	A	ほぼ達成(8割以上)
	B	概ね達成(6割以上)
	C	変化の兆し(4割以上)
	D	不十分(4割未満)

※学校関係者評価実施日とは、最終回の学校評価懇話会を開催し、学校自己評価を踏まえて評価を受けた日とする。

出席者	学校関係者	4名
	生徒	2名
	事務局(教職員)	10名

学 校 自 己 評 価					年 度 評 価 (2 月 1 日 現 在)		
年 度 目 標					年 度 評 価 (2 月 1 日 現 在)		
番号	現状と課題	評価項目	具体的方策	方策の評価指標	評価項目の達成状況	達成度	次年度への課題と改善策
1	・オーダー方式を含めた授業研究は引き続き行い、生徒一人ひとりの実態に合わせた授業に取り組んでいくことが課題である。 ・ICTの活用は、よい実践がみられる。タブレット端末のソフトウェアを利用し、絵本として使うなど、工夫して活用している情報を教員間で共有し、一人ひとりの実態に合わせた指導に生かせるようにしていくことが必要である。 ・放課後は会議が多いため、精選し、教材研究等の時間を確保していくことが課題である。	○児童生徒一人ひとりの実態に沿った授業を行う。	①研究部を中心とした「より充実した自立活動をめざして」の研究を外部講師とともに進め、各学部にて研究を行う。 ②オーダー方式による研究授業を年次・経験者研修の対象者を中心として行う。 ③タブレットの活用の仕方について実践事例を共有し、個に応じた活用ができるよう工夫する。 ④新しくなった図書館の検索システムを活用し、図書を利用しやすくする。 ⑤会議の持ち方、あり方を工夫し、教材研究等ができる時間を増やす。	①各学部のテーマに沿った研究が行えたか。 ②研究授業の成果を、その後の授業に活かされたか。 ③実践事例が共有できたか。 ④検索システムが新しくなり、児童生徒が利用できたか。 ⑤教材研究等の時間が増加したか。	各方策により、一人ひとりの実態に沿った授業研究が進んだ。 ①外部講師による巡回相談指導、研究協議が行われた。年度末にまとめを行う予定。 ②5年次研修者がオーダー方式による研究授業を実施。授業力が向上した。 ③タブレットの個別実践が行われ、事例の共有が進んでいる段階である。 ④検索システムの利用は少なかつた。図書委員会の図書新聞による啓発等で図書の利用は進んだ。 ⑤グループ会を増やしたが、会議のない日を設定したことで、若干教材研究時間が増加した。	A	今後も個に応じた指導の取組みが必要である。 ①3年スパンで取り組む内容について、外部からの助言を参考とし、実態に即した内容となるように研究する。 ②実施のハードルを低くし、年次研修者以外の教員も取組めるようにできるか。 ③事例が共有できる仕組みを整える。 ④図書委員会の取り組み等を生かし、図書に触れる機会を増やす。 ⑤会議の数には校内組織の見直しも必要。
2	・支援籍学習や学部の行事で児童生徒が校外に出ることや、ニーズに応じた教育支援を進めたことで特別支援学校の理解が進んだ。 ・関係機関や企業との連携、教員間の交流を引き続き行っていくことが必要である。	○センター的機能を充実させる。	①就学支援及び支援籍学習を重点化した関係市町教委とのネットワーク会議を開催し、連携を高める。(6月、11月) ②個のニーズに応じた企業向け学校公開を実施する。 ③児童生徒が授業で作成した作品・製品の展示・頒布を通学区域等へ広げる。	①支援籍学習の理解が高まったか。また、就学にかかわる連携が図れたか。 ②地域の企業に本校の理解が進んだか。 ③通学区域すべての市町で実施できたか。	各方策により、センター的機能が充実した。 ①希望する児童生徒48名(小42,中6)が実施できた。ネットワーク会議は2回実施。3月も追加実施予定。 ②11月の学校公開来校は12件で、昨年より7件増加。 ③作品展のある全ての市町で実施できた。	A	ネットワーク会議等による市町教育委員会との連携が今後も必要である。 ①支援籍学習の回数、校内調整が課題。 ②進路指導主事の訪問を補うホームページ内容の検討が必要。 ③今後の作品展への出品を続けたい。
3	・学校メール以外の連絡方法として、伝言ダイヤルの利用など、複数の連絡手段を保護者へ周知することが課題である。 ・担当教員養成期間の短縮についてはまだ工夫の余地がある。 ・ヒヤリハットの活用を医療的ケア以外にも広げることで学校全体の事故防止意識が高まる。	○児童生徒が安心して学習できる環境整備を行う。	①昨年度14名の担当教員を3年計画で倍増させる(目標、平成30年度達成)。 ②小さなことでも報告を促し、報告のあった「ヒヤリハット」及び「ハッと気づき」報告について分析を進める。 ③災害の状況に応じた防災訓練を工夫して行う。 ④非常出口の名称を統一し、見やすい表示をする。	①平成28年度、担当教員数が18人になったか。 ②原因を確認し、改善策をより具体的にあげ、事故防止に取り組めたか。 ③避難方法を理解し、適切に避難することができたか。 ④新しい非常出口の名称が定着したか。	学習環境の整備が進んだ。 ①保護者の協力を得て、担当教員は19人となった。 ②各報告に対し分析を行い教職員に周知した。緊急のものについては翌朝会で情報を共有した。 ③地震、火災に対する訓練を実施した。 ④各分掌での行事計画の際に名称を使うことが増えてきた。	A	増加する医療的ケアが必要な児童生徒対応は常に改善が必要である。 ①担当教員育成の研修には多くの時間がかかる。現場での医療的ケアの必要性和研修時間のバランスが課題。 ②マニュアル等の整備により事故防止が進んでいる。ヒヤリハットの事例検討共有を今後も進めたい。 ③可能性のある災害想定訓練は今後も必要。

学 校 関 係 者 評 価		
実施日	平成29年2月21日	
学校関係者からの意見・要望・評価等		
<ul style="list-style-type: none"> ・個に応じた指導は市町でも課題となっている。丁寧な指導の取り組みを継続してほしい。 ・タブレットは、障害の状況に応じ有効な道具となる。 例えば、どっちがいいか選ばせたり、触れたり叩いたりすると数が増えていく機能を使ったり。また、授業であてられることが苦手な子供でも、タブレットなら答えられることがある。画面が苦手な子供にはキーボードを使用できるなど、個に応じた配慮が柔軟にできる。 他校の実践を調べるとともに、個別指導でのタブレット活用の有効性をさらに研究してほしい。 ・達成度 A は妥当である。 		
<ul style="list-style-type: none"> ・支援籍ではとてもいい経験ができていく。ぜひ継続してほしい。 ・作品展の場所について、川島町は役場1階ギャラリーの活用を進めている。ぜひ利用してほしい。 ・T 研修会の開放やボランティア養成講座への学生の参加など、外部の方を学校へ来ていただく工夫をすると、地域との連携がさらに進むだろう。 ・達成度 A は妥当である。 		
<ul style="list-style-type: none"> ・担当教員の育成については、研修に関する仕組みが工夫され毎年改善されている。さらに工夫を重ねていただきたい。また、医療的ケアのマニュアルはとても丁寧にできている。ケアと研修のバランスが難しいところであるが、ぜひ今後も取組んでほしい。 ・ヒヤリハットは出てくるのが大切である。出てきた事例を検討し、今後も活用してほしい。 ・児童生徒の安全確保について様々な面から検討している。普段から意識をすることが大切である ・達成度 A は妥当である。 		